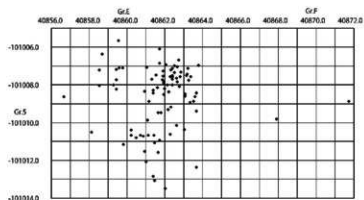
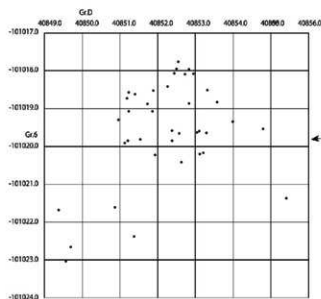


図47 縄文時代早期土坑2 (S=1/30)



【SR 1 (S=1/200)】



【SR 1 (S=1/100)】

図 49 碎片分布

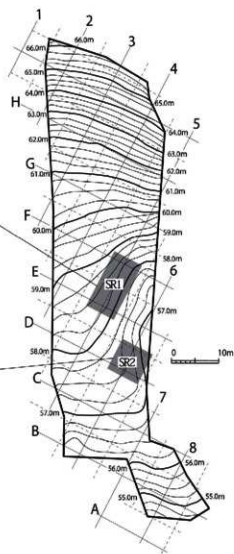


図 48 碎片集中箇所位置 (S = 1/800)

5 碎片集中箇所

散礫検出面において、石器碎片の集中箇所が2箇所確認された。EAc区に中心がある箇所をSR1、D5c区に中心がある箇所をSR2とする。

SR1及びSR2はIV層下部からVa層にかけての層位で検出された。しかし、SR1とSR2は散礫と重複せずに分布しているため、層位的に先後関係を判断するのは困難である。SR1とSR2ともに碎片に混じて少量だが土器片が出土しており、この土器から集石遺構などの時期とほぼ同じであったと考えられる。

周辺から黒曜石やチャートの石器未成品や石核が出土しており、石器製作跡であった可能性が高い。

【SR1 (図48-49)】

SR1は黒曜石の碎片が多い。調査区南側の緩斜面に位置しており、集石遺構の立地と異なる。また、他の遺構とまったく重複せずに分布している。

【SR2 (図48-49)】

SR2はチャートの碎片が多い。SR1より傾斜は緩やかな場所に位置する。西はSI44を中心とした集石遺構の一群と近接している。

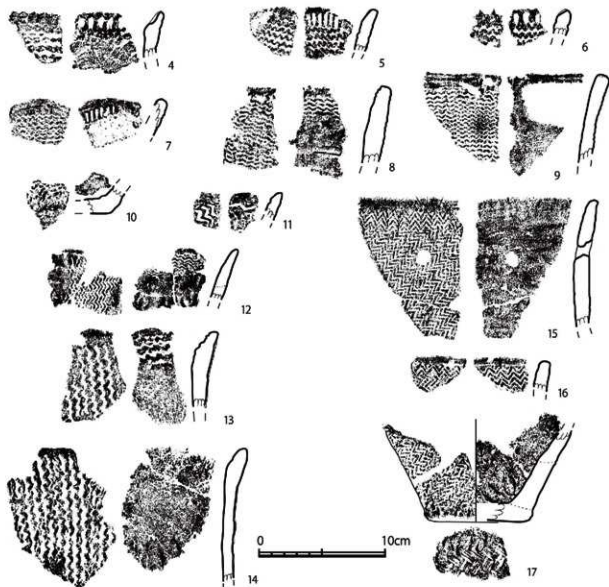


図50 縄文時代早期土器1 (S=1/3)

6 土器

縄文時代早期の土器は45箱分出土した。内掲載したものは25箱分、未掲載が2箱分である。全体的に小破片が多く、接合しても口径の復元が困難であった。遺物の出土位置・層位は散濺中、遺構内、V b 層中からであるが、原位置を保った遺物はない。

山形押型文土器、外面横方向施文

(図50 4～10)

4は内面口唇部に竹管状工具による刺突文が施される。7は波状口縁の頂部である。8の内面は押型文のみの施文である。10は底部である。底部形態は平底である。

山形押型文、外面縦または不定方向施文

(図11、12 11～19)

12の外面は縦方向の施文であるが、部分的にナデ消す。13・14の押型文は線が太く、胎土の特徴文様が似る。13は内面口唇部に横方向に施文するが、14は施文しない。15～16は線の細い押型文である。15・16は胴部外面に斜方向に施文した後、口縁部付近を横方向に施文する。17は底部であり、外面は底部付近まで施文され、底部には網代瓦痕が残る。15・17は胎土の特徴や文様が類似しており、同一個体の可能性がある。18は細かい山形押型文である。一部、文様が乱れ、楕円のように見える部分がある。19は未貫通の補修孔が確認された。

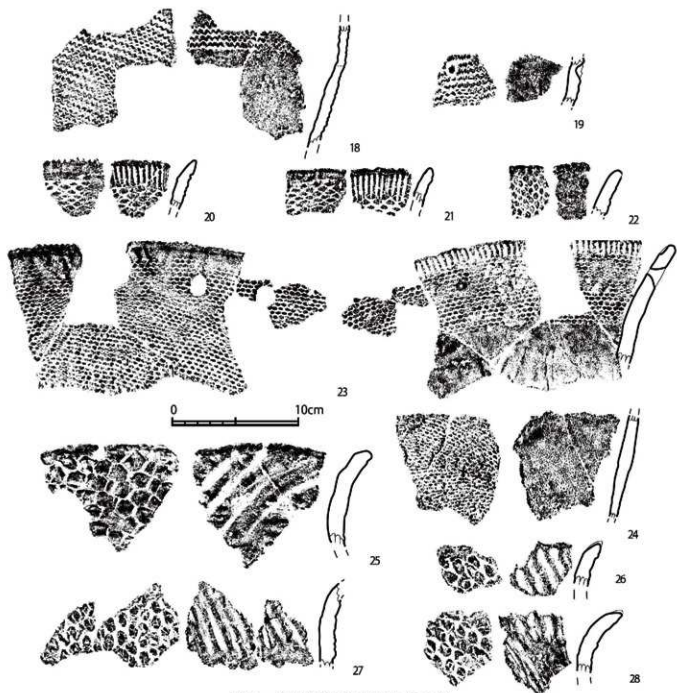


図 51 縄文時代早期土器 2 (S=1/3)

楕円押型文(細粒)

(図 51、52 20～24、30～32)

23は内外面ともに細粒の押型文が整然と施文される。補修孔が穿孔され、対応する補修孔を持つ破片も確認された。口縁は外反しつつ開く形態であり、器形や文様は下管生B式に似る。24は施文方向が様々であり、文様の一単位軸が確認できる。30は部分的に文様がナデ消される。31・32は径の狭い平底状の底部である。文様は底部まで及んでいる。

楕円押型文(粗大粒)

(図 51、52 25～29)

25は網目状の粗大な楕円押型文である。口縁は大きく外反しながら開く。器形と文様から高山寺式併行期のものであろうか。27～29は粗大な楕円押型文土器である。内面には原体条痕が施されている。26は1段、28は2段である。口縁部は外反しつつ大きく開いており、器形と文様の特徴から田村やトコロ式に相当すると考えられる。

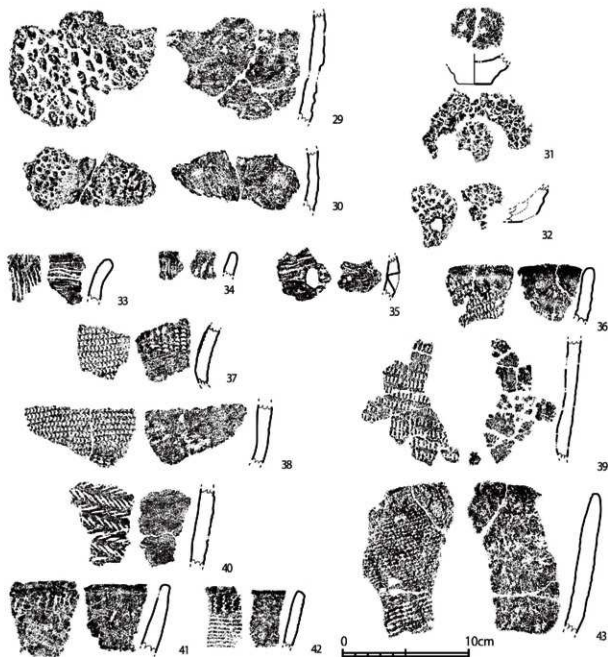


図 52 縄文時代早期土器 3 (S=1/3)

撚糸文・縄文土器 (図 52 33～36)

33, 34 は撚糸文土器の口縁部である。33 は内面に外面と同一原体を用いて施文されている。34 の内面は屈折条が施されている。36 は縄文土器である。

その他の押型文土器 (図 52 37～39)

37・38 は三日月形の押型文土器である。37 は口縁部付近の破片であり、内面に外面と同一原体による施文がなされている。施文方向は内面横、外面縦である。また、外面の拓本中央では三日月形が対称に位置しているため、施文方向が変化したと考えら

れる。39 は細長い長方形を一つの単位とする押型文である。格子目文に似るが、通常の格子目押型文に比べ、格子部分の幅が太く平坦である。

南九州貝殻円筒土器 (図 52 40)

40 は外面に「ハ」字形 90 度倒した形で短沈線を施している。桑ノ丸式に相当する。

貝殻条痕文土器

(図 52～54 41～50、52～55)

41・42 は外面口縁部に貝殻腹縁刺突文を施す。41 はその下部に文様を施さないが、42 は横方向の



図 53 縄文時代早期土器 4 (S=1/3)

貝殻条痕を施す。前原式に相当する。43は外面に貝殻条痕の連続刺突文を施す。下割釜式土器に相当する。44～45は外面のほぼ全体に貝殻条痕を施す。胎土や文様の特徴から同一個体であると考えられる。これらの資料から全体の器形を推せば、口縁部はやや内湾し、底部は平底である円筒形の器形が復元できよう。貝殻条痕が横方向に施されているが、口縁部付近は方向が一定しない斜方向の施文である。重複関係から先に口縁部付近、次に胴部に施文する。胴部の施文は不完全で、若干空隙がある。内面の調整は粗く、指オサエの痕跡が明瞭に残る。底部は丁寧にナデ調整が行われている。器形調整の特徴から、南九州貝殻文円筒土器の範疇で捉えられるであろう。47・48は摩耗が激しいが外面に斜方向の貝殻条痕が確認された。47は口縁部が内湾し、48は外反する。49・50・52は外面に縦方向または斜方向の貝殻条痕が認められる。口縁部はやや外反するかほぼ直線的に開く。53～55は底部である。54は胎土に小孔が多く、スポンジ状である。また、底部は器壁に比して極端に厚い。52は上げ底気味の底部である。外面の貝殻条痕は底部まで達する。この土器は底部内面で剥離しており、底部成形岩に内面から粘土を追



加したようである。51の口縁部は直線的に開き、口縁部外面は肥厚する。外面調整はナデである。しかし、胎土に小孔が多く、内面は丁寧にナデ調整が施されており、他の貝殻条痕土器の特徴と似ている。

無文土器 (図 54 56)

内外面ともに丁寧にナデあるいは磨きが施されている。器厚が急激に厚くなっており、底部付近と考えられる。出土層位はV b層である。

不明 (図 54 57)

外面に5条一組の沈線文を格子状に施す。詳細は不明だが、文様から早期末の土器であろうか。

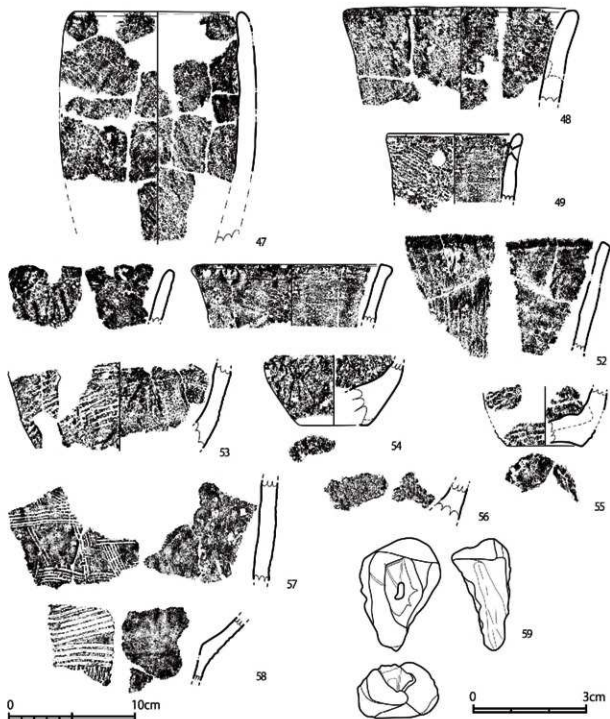


図 54 縄文時代早期土器 5 (S=1/3)

塞ノ神式土器 (図 54 58)

口縁部がラッパ状に開く塞ノ神式土器である。屈曲部下部に縦方向の燃糸文が見られる。この上から沈線文が施されており、沈線の中に燃糸文がわずかに見える。

土製品 (図 54 59)

59 は散礫中から出土した。短い粘土ひもを折り曲

げ、先端を結合させたような形状である。中央は結合されておらず、中空になっている。底面と左側面は平坦である。中央部分は棒状のものをを用いた線が見られる。また、左側面には横方向に砂粒の動きが見られる。この土製品が単独で成り立つものか、別のものに付属していたものかは不明である。

表8 縄文時代早期土器一覽

番号	出土位置 区・遺跡名	種類	器種 形状	手法・技法・文様ほか		色調		敷土	備考
				外面	内面	外面	内面		
4	D4a	押型文土器(横形)	深鉢(深部)	横字押型文(横走)	口唇部近視前方部近視線	にんい・褐色 75YR6/4	にんい・褐色 75YR7/4	2m以下灰白色・白色粒 1m以下淡黄色粒・黒石	短足部は平段付管状のもの。上から下に濃灰。
5	C3b	V a	押型文土器(山形)	深鉢(深部)	山形押型文(横走)	山形押型文(工部部付近視線)	横ににんい・黄褐色 10YR6/3	にんい・黄褐色 10YR7/4	角閃石・1m以下透輝粒
6	-	-	押型文土器(山形)	深鉢(深部)	山形押型文(横走)	山形押型文(横走)	にんい・褐色 75YR7/4	にんい・黄褐色 10YR7/3	角閃石 1m以下透輝粒
7	D4a	V a	押型文土器(山形)	深鉢(深部)	山形押型文(横走)	口唇部近視前方部近視線	淡黄色 25YR7/3	淡黄色 25YR7/3	7m灰白色粒 3m以下灰白色粒 1m以下灰白色粒・角閃石
8	C3a	V b	押型文土器(山形)	深鉢(深部)	山形押型文(横走)	山形押型文(口唇部付近視線)	にんい・黄褐色 10YR7/4	にんい・黄褐色 10YR7/4	9m淡黄色粒 3m赤褐色粒 1m以下淡黄色粒・透輝粒
9	B5d	V a	押型文土器(山形)	深鉢(深部)	山形押型文(横走)	ナデ	にんい・黄褐色 10YR7/3	にんい・黄褐色 10YR7/3	3m以下乳白色粒 2m以下灰色粒・光沢のある黒色粒
10	C4c	押型文土器(山形)	深鉢(深部)	山形押型文(横走)	ナデ	にんい・褐色 75YR7/4	にんい・黄褐色 10YR6/4	5m以下白色粒 2.5m以下褐色粒・黒石	
11	C3b	押型文土器(山形)	深鉢(深部)	山形押型文(横走)	山形押型文(横走)	にんい・褐色 75YR5/3	にんい・褐色 75YR7/3	3m以下灰白色粒 2m以下灰色粒・角閃石	
12	D4b+E4c	押型文土器(山形)	深鉢(深部)	山形押型文(横走)	山形押型文(横走)	明褐色 75YR6/6	明褐色 75YR6/6	2m以下透輝粒 1m以下灰色粒	
13	C4c	押型文土器(山形)	深鉢(深部)	山形押型文(横走)	山形押型文(口唇部付近視線)	にんい・褐色 75YR5/4	暗褐色 75YR7/4	4m以下灰色粒 2m以下黒色粒・透輝粒・乳白色粒	押型文はミニミズ型付
14	B5b	押型文土器(山形)	深鉢(深部)	山形押型文(横走)	山形押型文(口唇部付近視線)	にんい・褐色 75YR6/4	にんい・黄褐色 10YR6/4	4m以下乳白色粒 2m以下透輝粒・灰色粒・角閃石	
15	B5d	V a	押型文土器(山形)	深鉢(深部)	横字押型文(横走)	ナデ	にんい・黄褐色 10YR7/4	褐色 75YR7/6	1m以下乳白色粒・透輝粒
16	C3b	押型文土器(山形)	深鉢(深部)	山形押型文(横走)	山形押型文(横走)	褐色 75YR7/6	褐色 75YR7/6	角閃石 1m以下透輝粒	
17	B5d+SP1	押型文土器(山形)	深鉢(深部)	山形押型文(横走)	ナデ	にんい・褐色 75YR7/4	褐色 75YR4/1	2m以下乳白色粒・赤褐色粒 1m以下灰色粒	底面に黄褐色。復元直径7.5cm。
18	C3d+SP5	押型文土器(山形)	深鉢(深部)	山形押型文(横走)	山形押型文(口唇部付近視線)	にんい・黄褐色 10YR7/4	暗褐色 10YR3/4	4m以下にんい・黄褐色粒 3m以下白色粒 2m以下黒色粒・角閃石	山形押型文が認められている
19	S20A	押型文土器(山形)	深鉢(深部)	山形押型文(横走)	ナデ	にんい・黄褐色 10YR7/4	灰黄褐色 10YR5/2	5m以下黄褐色粒・1m以下白色粒・角閃石	尖頭部透輝粒あり
20	C4c	押型文土器(横形)	深鉢(深部)	横字押型文(横走)	短足部(口唇部付近)	にんい・褐色 75YR6/4	褐色 75YR4/1	2m以下乳白色粒・灰色粒・角閃石	
21	C4c	押型文土器(横形)	深鉢(深部)	横字押型文(横走)	口唇部近視前方部近視線	にんい・褐色 75YR6/4	褐色 75YR4/1	1m以下黒色粒・透輝粒・乳白色粒・角閃石	
22	D5d	押型文土器(横形)	深鉢(深部)	横字押型文(横走)	ナデ	にんい・黄褐色 5YR5/4	にんい・黄褐色 5YR5/4	2m以下淡黄褐色粒	
23	B5b+B5c +C3b+D3D	押型文土器(横形)	深鉢(深部)	横字押型文(横走)	口唇部近視前方部近視線	にんい・黄褐色 10YR7/2	にんい・褐色 75YR5/3	2m以下乳白色粒・角閃石・暗褐色黄褐色粒	透輝粒あり
24	B5b	押型文土器(横形)	深鉢(深部)	横字押型文(横走)	原形赤土	にんい・褐色 5YR7/4	にんい・黄褐色 10YR5/3	4m以下乳白色粒・陶磁にんい・褐色粒・角閃石	内面に浮付層
25	B7b	押型文土器(横形)	深鉢(深部)	横字押型文(横走)	原形赤土(赤走)	にんい・黄褐色 10YR7/3	にんい・褐色 75YR7/3	5m灰白色粒・明褐色粒 2m以下褐色粒・乳白色粒	山形式浮付分
26	D4d	押型文土器(横形)	深鉢(深部)	横字押型文(赤走)	原形赤土1段? (赤走)	灰黄褐色 10YR6/2	にんい・褐色 75YR6/3	6m灰色粒 5m以下黒色粒 1m以下乳白色粒・角閃石	製作であるため原形赤土の割合は不確定

27	Dd	押型文土器(模写)	深鉢口縁部付近	模写押型文(模写)	原形未成1段? (模写)	灰黄褐色 10R6/2	灰黄褐色 10R6/2	25cm以下に灰・黄褐色粒・角礫石		
28	Dd	押型文土器(模写)	深鉢口縁部	模写押型文(模写)	原形未成2段 (模写)	褐色 7.5YR6/6	に灰・黄褐色 10R7/3	角礫石 1mm以下浮遊粒	原形未成より上・下段	
29	Ea+Efc	押型文土器(模写)	深鉢口縁部	模写押型文(模写)	ナデ	に灰・褐色 7.5YR7/4	に灰・黄褐色 10R6/2	25cm以下に灰・黄褐色粒・角礫石		
30	Dd	押型文土器(模写)	深鉢口縁部	模写押型文(模写)	ナデ	に灰・褐色 7.5YR7/4	灰黄褐色粒 10R6/2	2cm以下灰褐色 0.5cm以下黄褐色粒・黒色粒	内面に黒色層	
31	Ef	押型文土器(模写)	深鉢口縁部	模写押型文(模写)	不明	に灰・褐色 7.5YR5/4	に灰・赤褐色 5YR5/4	0.5cm以下黄褐色粒・微細乳白色粒		
32	Gcd	押型文土器(模写)	深鉢口縁部	模写押型文	ナデ	に灰・褐色 7.5YR6/4	に灰・黄褐色 10R6/4	微細灰黄褐色粒	断面 2.2cm	
33	Efd	煎灰文系	深鉢口縁部	煎灰文(模写)	口内群付(模写)	に灰・赤褐色 5YR5/4	に灰・赤褐色 5YR5/4	1.5cm以下赤褐色粒・角礫石・微細灰白色粒		
34	Cc	煎灰文系	鉢口縁部	煎灰文	原形未成	に灰・赤褐色 5YR5/4	に灰・赤褐色 5YR5/4	1cm以下黄褐色粒		
35	-	煎灰文系	深鉢口縁部付近	煎灰文	ナデ	明赤褐色 5YR6/6	に灰・赤褐色 5YR5/3	2cm以下に灰・黄褐色粒・微細赤褐色光沢粒	補修孔有り(9→9)	
36	Es	煎灰文系	深鉢口縁部	煎灰文	ナデ	に灰・褐色 7.5YR6/4	に灰・褐色 7.5YR5/4	1cm以下灰褐色・微細赤光沢粒		
37	Dd	押型文土器	深鉢口縁部付近	押型文(模写)	押型文(内面と同じ模様)	灰褐色 2.5Y7/2	に灰・黄褐色 10R7/3	4.5cm以下灰白色粒 4cm以下黄褐色粒		
38	Ec	押型文?	深鉢口縁部	原形不明押型文	ナデ	灰黄色 2.5Y7/2	灰黄色 2.5Y7/2	4cm以下灰白色粒 3cm以下黄褐色粒・角礫石		
39	9F	押型文土器	深鉢口縁部	原形不明	ナデ	に灰・赤褐色 5YR5/3	に灰・赤褐色 5YR5/3	3cm以下灰白色粒 1.5cm以下灰褐色粒	ネガティブ押型文か?	
40	Bb+Dd	煎灰文系	深鉢口縁部	ヘラ掘きによる群付文	ナデ	に灰・褐色 7.5YR6/4	に灰・褐色 7.5YR5/3	5cm以下灰白色粒 2cm以下黄褐色粒	黒ノカグタイブ	
41	Dc	煎灰文系	深鉢口縁部	群付煎灰群付焼文	ナデ	に灰・黄褐色 10R6/3	に灰・黄褐色 10R6/3	1cm以下乳白色粒・に灰・黄褐色粒		
42	9B	煎灰文系	深鉢口縁部	口内群付(近畿)煎灰群付	ナデ	黄褐色 2.5Y7/3	に灰・黄褐色 2.5YR6/3	1cm以下灰白色粒		
43	Db	煎灰群付文土器	深鉢口縁部	群付文(下腹方向)煎灰群付	ナデ	に灰・褐色 7.5YR7/4	灰白色 10R6/2	4cm以下に灰・黄褐色粒 3cm以下灰白色粒 3.5cm以下乳白色粒・角礫石		
44	Bb+Bd	V a	煎灰群付文土器	煎灰口縁部	煎灰口縁部	ナデ・指ナサエ	に灰・赤褐色 5YR5/4	に灰・黄褐色 10R5/4	7cm以下灰白色粒 3cm以下乳白色粒 1cm以下灰褐色粒・光沢のある黒色粒	21・20と同じ個体か 補修孔有り
45	Bc+Bd	V a	煎灰群付文土器	深鉢口縁部	煎灰口縁部	ナデ・指ナサエ	褐色 7.5YR6/6	褐色 7.5YR6/6	6cm以下黄褐色粒 2cm以下浮遊粒 1cm以下光沢のある黒色粒	19・21と同じ個体か
46	Bb+Bc+Cd	V a	煎灰群付文土器	深鉢口縁部	ナデ	丁字ナデ・指ナサエ	褐色 7.5YR6/6	に灰・褐色 7.5YR6/4	9cm以下乳白色粒 6cm以下灰褐色粒 1cm以下黒色粒	断面直径 17cm
47	Bb	煎灰群付文土器	深鉢口縁部	煎灰口縁部	ナデ	に灰・褐色 7.5YR6/4	に灰・褐色 5YR4	2cm以下灰白色粒・乳白色粒・黒色粒・灰色粒	断面径 11.2cm	
48	Cc+Cc +Cdc+SBT	煎灰群付文土器	口縁部	煎灰口縁部	ナデ	に灰・黄褐色 10R7/3	に灰・黄褐色 10R7/3	3cm以下に灰・黄褐色粒 1cm以下灰白色粒・微細赤褐色光沢粒	断面径 18.6cm	
49	Ga	煎灰群付文土器	深鉢口縁部	群付煎灰群付	ナデ	黄褐色 2.5Y7/3	黄褐色 2.5Y7/3	2cm以下灰白色粒・微細赤褐色光沢粒		
50	Dfd	煎灰文系	深鉢口縁部	群付煎灰群付焼文	ナデ	に灰・黄褐色 10R7/3	灰黄褐色 10R6/2	3.5cm以下に灰・黄褐色粒 3cm以下黄褐色粒 1cm以下灰白色粒・微細赤褐色粒		
51	Cd	煎灰文土器	深鉢口縁部	ナデ	ナデ	灰黄褐色 10R6/2	に灰・黄褐色 10R5/3	2cm以下黒色粒・透明粒	断面径 15.8cm	
52	Cc	煎灰群付文土器	深鉢口縁部	煎灰口縁部	ナデ	に灰・黄褐色 10R6/3	黄褐色 5YR5/2	微細灰白色粒	補修孔4ヶ所(5から5)あり(1は焼不透)	
53	Dc	煎灰群付文土器	深鉢口縁部付近	煎灰口縁部(下腹方向)	ナデ	に灰・黄褐色 10R7/3	灰黄色 2.5YR6/2	5cm以下灰黄色粒	断面径 5.8cm	
54	Cc	煎灰群付文土器?	深鉢口縁部	不明	ナデ	に灰・褐色 7.5YR7/4	に灰・黄褐色 10R7/4	3cm以下灰褐色粒 2cm以下黄褐色粒	胎土はスポンジ状。小孔多し。断面径 5.2cm	
55	Dd+Dd	煎灰群付文土器	深鉢口縁部	煎灰口縁部	ナデ	に灰・黄褐色 10R7/3	黄褐色 2.5YR4/1	5cm以下灰褐色粒 1.5cm以下灰白色粒	断面径 5.8cm	
56	Ccd	煎灰文土器	深鉢口縁部付近	丁字ナデ	ナデ	に灰・褐色 7.5YR6/4	明赤褐色 5YR6/6	1cm以下群付群付・灰白色粒・灰褐色粒		
57	Cd+9H	煎灰文系	深鉢口縁部	以焼文	ナデ	明赤褐色 5YR6/6	に灰・赤褐色 5YR5/4	2cm以下灰白色粒・黒色粒 1mm以下浮遊粒		
58	Ffd	煎灰文系	深鉢口縁部	煎灰文(焼文)群付	ナデ	に灰・褐色 7.5YR6/4	に灰・黄褐色 10R6/3	1cm以下浮遊粒・黒褐色粒・空母	蓋ノ神式	

表9 縄文時代早期石器一覧

番号	出土位置 区・遺構	層	石材	最大径 (cm)			重量 (g)	刃種	観察所見
				長	幅	厚			
60	SR1-22	-	黒曜石	1.3	1.2	0.2	0.3	石鏃	
61	-	-	チャート	1.7	1.4	0.2	0.3	石鏃	
62	SR46	-	チャート	1.3	1.5	0.3	0.5	石鏃	
63	B7d	V a	流紋岩	2.3	1.6	0.4	0.9	石鏃	未成品、97と同石材
64	C6c	V a	チャート	3.8	1.3	0.4	1.7	石鏃	未成品か
65	B5d	V b	黒曜石	1.4	1.4	0.3	0.3	石鏃	
66	F4c	V b	黒曜石	1.5	1.6	0.4	0.4	石鏃	
67	-	-	チャート	1.8	1.3	0.3	0.4	石鏃	
68	D5a	V a	チャート	2.1	1.9	0.3	0.9	石鏃	完形
69	C6a	V a	頁岩	3.5	2.0	0.4	1.7	石鏃	
70	SR1-82	-	チャート	2.0	1.8	0.5	1.0	石鏃	
71	SR1-4	-	チャート	1.9	1.8	0.4	0.7	石鏃	
72	C6b	V a	チャート	0.8	2.1	0.5	2.0	石鏃	
73	A7d	V b	チャート	2.6	1.7	0.3	0.9	石鏃	
74	C4d	V a	チャート	0.5	2.0	0.5	1.8	石鏃	
75	B5d	V a	黒曜石	2.0	1.4	0.7	1.3	石鏃	完形
76	D4b	V b	チャート	2.1	2.1	0.7	3.0	石鏃?	未成品か
77	SR1-23	-	チャート	3.4	2.2	1.1	7.9	石鏃?	未成品か
78	D5a	V b	黒曜石	2.1	1.0	0.3	0.5	石鏃	
79	S209	-	黒曜石	1.3	1.9	0.4	0.7	石鏃	
80	SR1-48	-	頁岩	2.9	3.8	0.7	5.0	スクレイパー	
81	B7b	V a	流紋岩	3.1	3.8	0.9	7.4	刮片	
82	B6d	V a	流紋岩	4.8	3.4	1.1	18.6	二次加工刮片	
83	B7b	V a	流紋岩	5.0	4.3	1.7	25.2	刮片	
84	C6c	V a	ホルンフェルス	8.7	7.4	2.3	160.7	刮片	
85	D5b	V b	ホルンフェルス	9.7	5.8	2.3	138.9	刮片	
86	B8b	V b	チャート	1.7	3.2	1.0	3.9	二次加工刮片	
87	SR4	-	黒曜石	1.7	1.5	0.9	2.2	石鏃	
88	C5c	V a	黒曜石	2.0	2.9	1.2	5.7	石鏃	
89	D5a	V a	ホルンフェルス	8.2	4.0	1.6	57.5	石斧	
90	C5b	V a	砂岩	11.9	4.7	3.4	230.0	石斧	
91	B8b	V a	ホルンフェルス	12.6	4.6	2.5	94.3	石斧	大部分欠損
92	C6c	V a	ホルンフェルス	10.8	7.5	3.0	270.0	二次加工刮片	
93	-	-	ホルンフェルス	10.9	8.9	3.3	367.0	石鏃	
94	C6a	V a	ホルンフェルス	13.9	11.5	3.2	620.0	石鏃	
95	C6a	V a	ホルンフェルス	9.5	4.5	0.3	150.0	二次加工刮片	
96	C6b	V a	ホルンフェルス	8.4	5.1	4.2	185.3	石鏃	
97	B8c	V a	流紋岩	10.3	8.9	3.8	538.0	石鏃	縁欠損多数あり
98	D3d	V a	砂岩	11.0	8.7	4.4	526.9	凹石	
99	-	-	尾跡山酸性岩類	9.0	8.5	4.1	486.9	磨石	
100	SR102	-	尾跡山酸性岩類	10.4	10.6	5.0	824.3	磨石	
101	C6c	V a	砂岩	10.3	5.4	4.3	336.2	敲石	
102	C5c	V a	砂岩	13.6	6.1	4.0	494.5	敲石	赤色顔料?付着
103	SR103	-	尾跡山酸性岩類	1.8	9.7	5.4	845.8	磨石	
104	C5d	V a	尾跡山酸性岩類	9.8	9.7	4.7	673.8	磨石	
105	C6a	V a	尾跡山酸性岩類	11.3	8.7	5.5	760.1	磨石	欠損あり
106	S203	-	砂岩	11.5	9.8	4.0	636.3	不明	赤色顔料?付着

7 石器

今回調査における縄文時代早期石器の出土量は85箱である。内掲載したものは15箱分、未掲載が7箱分である。遺物の出土位置・層位は掲載中、遺構内、V b層中からであるが、原位置を保った状態で出土した資料はないため、接合は行っていない。

石鏃(60～75)は18点出土した。石材は黒曜石4点、チャート12点、他2点である。未成品も含まれることから、遺構内での製作が予想される。89～91は磨製石斧である。89・90は素材の礫を粗く

打ち欠いて全体の形を作り出すが、背面は礫面を残し、刃部のみ研磨している。89は柄の装着部分が、90は刃部が欠損しており、使用・欠損の結果廃棄されたと考えられる。99～105は磨石・敲石である。磨石は尾跡山酸性岩類が主体である。102・106は赤色顔料のようなものが付着していた。色調はくすんだ赤色であり、顔料であればベンガラの類であろうか。被熱・加熱により何らかの成分が凝固して付着した可能性もある。自然科学分析は実施していない。

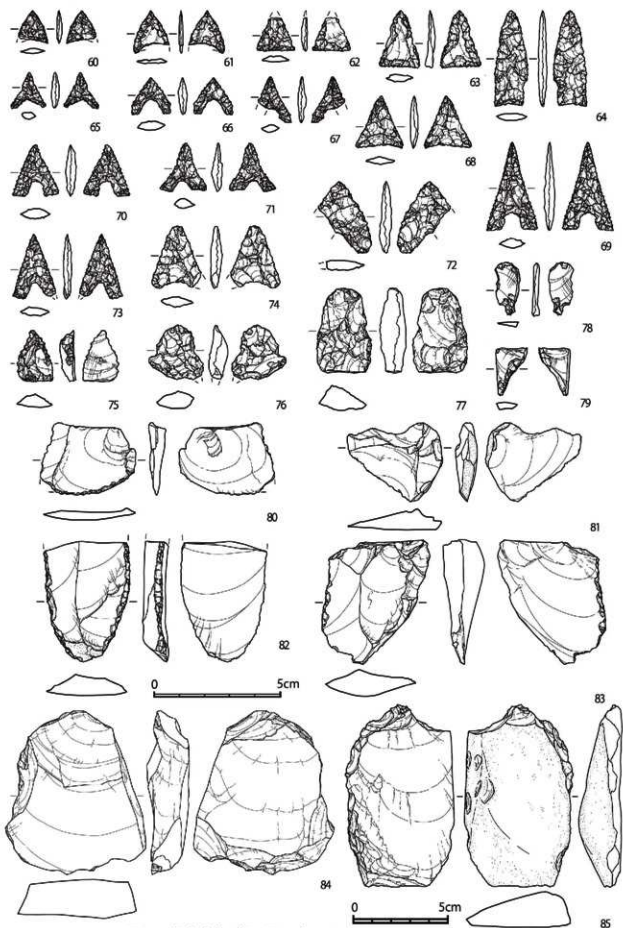


図55 縄文時代早期石器1 (60~84はS=2/3、85はS=1/2)

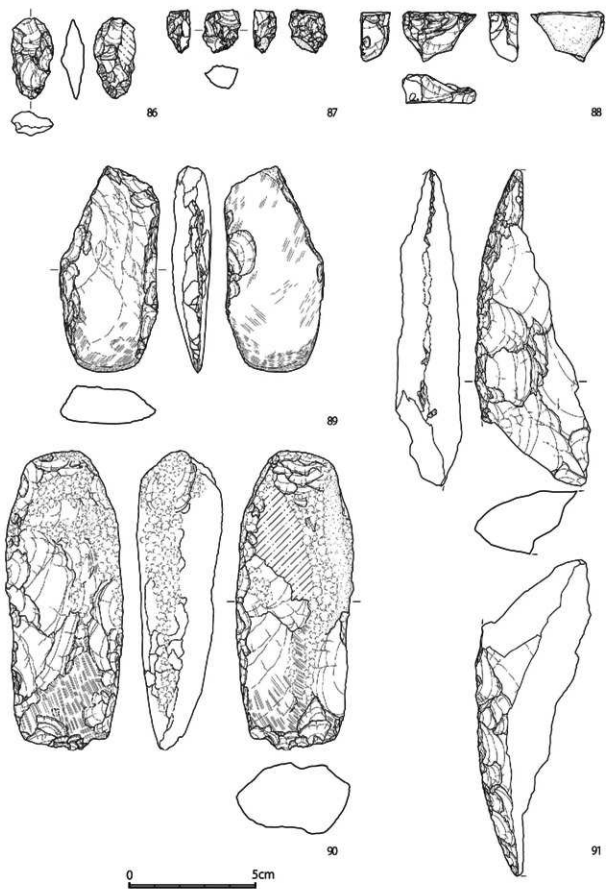


图 56 縄文時代早期石器 2 (S=2/3)

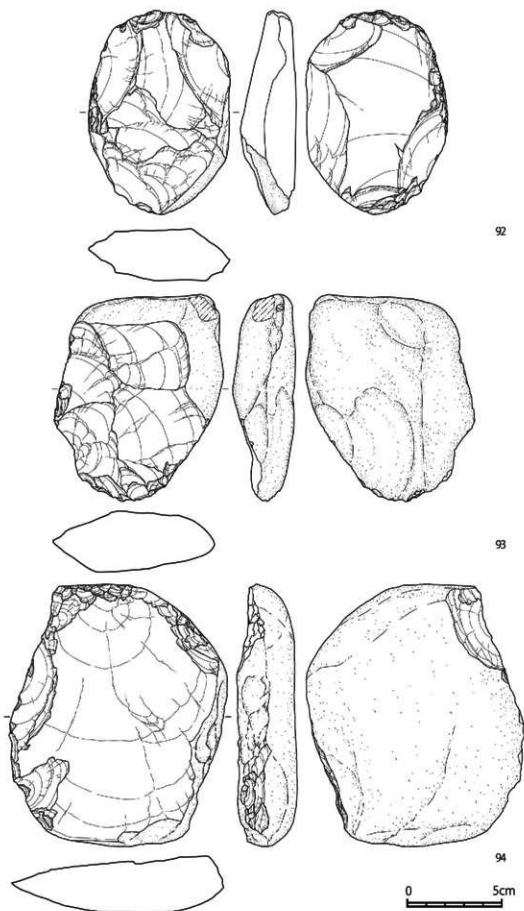


图 57 縄文時代早期石器 3 (S=1/2)

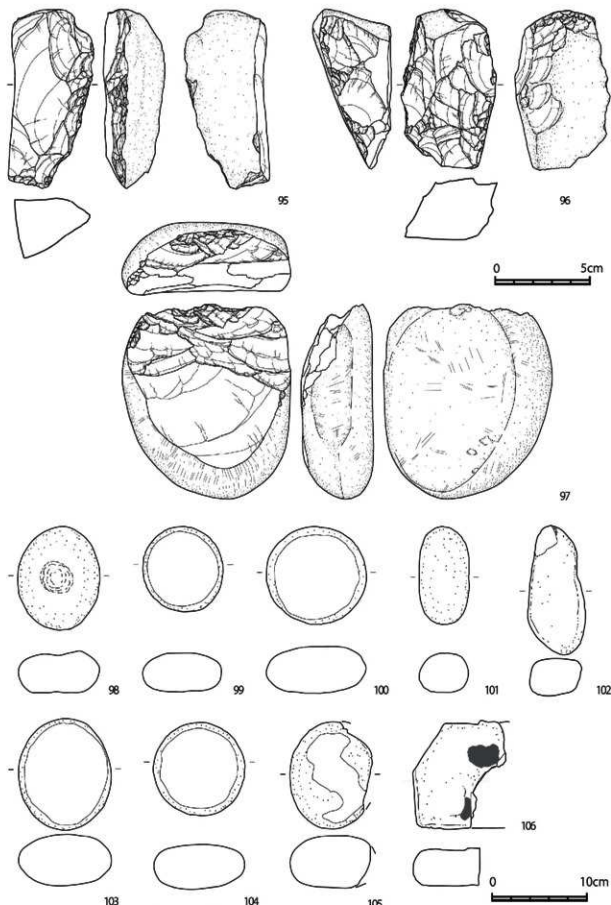


図 58 縄文時代早期石器 4 (95 ~ 97 は S=1/2、98 ~ 106 は S=1/4)

第3節 縄文時代晩期の遺構と遺物

I～III a層で縄文時代晩期の遺物が、III a層中で集石遺構が検出された。III b層上面で地形測量を行ったが、等高線の間隔は現在のものとほぼ同じであり、当時から地形の変化は少なかったと考えられる。

1 集石遺構 (図 59 S166)

S166はIII a層中から検出された。掘り込みはない。全て扁平な砂岩で構成され、被熱により赤化している。総重量は9kgである。遺構内から遺物は出土していないが、周辺から縄文時代晩期の遺物のみが出土しており、該期の遺構である可能性が高い。

2 土器

土器の出土状況は破片が散乱した状態であり、原位置を保ったものはないため、層ごとに取り上げた。土器の種類は粗製深鉢の孔列文土器と精製浅鉢の無文土器である。

孔列文土器 (図 61 107、109～116)

109と115を除き、口縁部は外反しながら開く。113～116は口縁部中程に突帯があり、穿孔位置は突帯の下になり、外面から穿孔されている。穿孔は貫通・未貫通のものがあるが、貫通したものでも内面に施成後剥離しており、当初は未貫通のものであったと考えられる。108は底部である。胎土や色調の特徴また大きさから、107と同一個体の可能性がある。同一個体と仮定すれば、口縁が外反しつつ開く盃状の大型浅鉢のような器形であろうか。

無文土器 (図 62 117～121)

117～121 精製浅鉢の口縁部である。内外面ともにミガキが施されている。

底部 (図 62 122～123)

122～123は底部である。出土層位は不明であるため、時期の特定は難しいが、III b層上面までの調査において出土したものである。123の外面には条痕が施され、底部には振り編みの圧痕がついている。122と123は胎土の特徴が縄文時代晩期の土器と似ているため、これらの土器とともに掲載した。

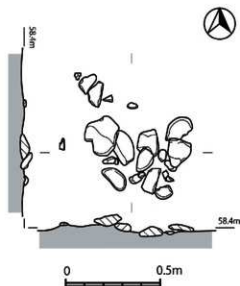


図 59 S166 (S=1/20)

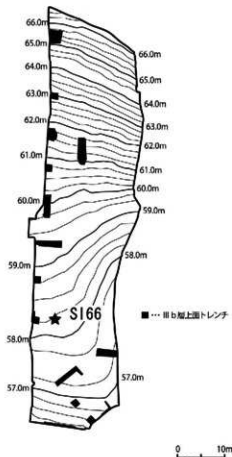


図 60 III b層上面遺構分布 (S=1/800)

表 10 縄文時代晩期土器一覧

番 号	出土 層位	種別	器種・ 部位	手法・調整 ・文様ほか		色調		胎土	備考
				外面	内面	外面	内面		
107	II	孔列文	粗製深鉢 口縁	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 10F63	黄褐色 25F61 灰褐色 25F61 10F63	5mm以下のにぶい赤褐色・にぶい 黄色・灰色粒を多く含む	復元口径 326cm 108 と同一個体が 竹筴 状工具による穿孔あり 穿孔箇所は観察 から焼成後歩瀝し、貫通
108	II	孔列文	粗製深鉢 底部	無	丁寧な ナデ	にぶい黄褐色 10F63	にぶい黄褐色 10F64	5mm以下の赤褐色粒 3mm以下 の乳白色粒 2mm以下の黒色粒 4mm以下の灰色粒を多く含む	底径 194cm 107 と同一個体が 底版が中 央が窪く彫れる 腹・亀裂が滑巻き状に 見えるため、粘土板の形状を示す可能性大
109	III a	孔列文	粗製深鉢 口縁	条痕	ナデ	淡黄色 25F73	灰黄色 25F62 25F73	2mm以下の灰色粒をやや含む	
110	II	孔列文	粗製深鉢 口縁	条痕	ナデ	淡黄色 25F63	にぶい黄色 25F63	3mm以下の赤褐色粒を含む	
111	不明	孔列文	粗製深鉢 口縁	条痕	条痕	にぶい黄褐色 10F64	褐色 75F66 10F64	4mm以下の赤褐色粒を含む	外面に附付
112	I	孔列文	粗製深鉢 口縁	条痕	条痕	にぶい黄褐色 10F64	にぶい黄褐色 10F65	5mm以下の赤褐色粒	
113	III a	孔列文	粗製深鉢 口縁	条痕	条痕	淡黄色 25F63	無灰黄色 25F62	3mm以下の赤褐色粒を含む	
114	III a	孔列文	粗製深鉢 口縁	条痕	ナデ	淡黄色 25F73	にぶい黄褐色 10F63	6mm以下のにぶい赤褐色粒、3mm 以下の乳白色粒 2mm以下ににぶい 褐色粒を含む	
115	I	孔列文	粗製深鉢 口縁	ナデ	ナデ	淡黄色 25F63	淡黄色 25F63 25F63	3mm以下のにぶい赤褐色粒・灰色 粒を含む	
116	I	孔列文	粗製深鉢 口縁	条痕	条痕	褐色 75F66 10F62	にぶい黄褐色 10F62	3mm以下の赤褐色粒を含む	
117	II	無文	粗製深鉢 口縁	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色 10F62	にぶい黄褐色 10F62	1mm以下の赤褐色・灰色粒を含む	
118	不明	無文	粗製深鉢 口縁	ナデ、 工具ナデ	ナデ、 工具ナデ	にぶい黄褐色 10F64	にぶい黄褐色 10F63	1mm以下の灰色粒を多く含む	
119	I	無文	粗製深鉢 口縁	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色 10F63	にぶい黄褐色 10F63	1mm以下の赤褐色・灰色粒を含む	
120	不明	無文	粗製深鉢 口縁	工具ナデ	工具ナデ	にぶい褐色 75F63	灰黄褐色 10F62	1mm以下の赤褐色・にぶい黄褐色 ・灰色粒を含む	
121	不明	無文	粗製深鉢 口縁	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色 10F63	褐色 10F61	1mm以下の灰色・灰白色粒を含む	
122	不明	無文	粗製深鉢 底部	ナデ	ナデ	淡黄色 10F63	淡黄色 25F63 10F63	2mm以下の灰黄色粒・灰色粒 5mmの灰色粒を含む	
123	不明	無文	粗製深鉢 底部	条痕 ・ナデ	条痕 ・ナデ	にぶい褐色 75F64	灰黄褐色 10F62	2mm以下の赤褐色・黒褐色 7mmの卵形赤褐色粒を含む	復元底径 86cm 底面に張り目(罫)圧痕?

表 11 縄文時代晩期石器一覧

番号	出土位置	区・遺構	層	石材	最大値 (cm)			重量 (g)	器種	観察所見
					長	幅	厚			
124	縄文遺跡 4T	I		砂岩	8.9	7.2	1.8	129.7	石鏃	刃部欠損あり
125	縄文遺跡 3T	I		ホルンフェルス	6.1	6.5	1.7	64.4	石鏃	柄部欠損あり
126	縄文遺跡 4T	III a		ホルンフェルス	16.8	14.6	0.7	597.0	石鏃	
127	-	-		砂岩	4.4	6.3	1.2	49.5	石鏃	
128	縄文遺跡 4T	III a		砂岩	5.7	7	1.4	79.2	石鏃	
129	縄文遺跡 4T	II		砂岩	5.4	6.1	1.6	76.7	石鏃	
130	-	-		砂岩	4.6	5.7	1.3	43.2	石鏃	
131	-	-		砂岩	5.5	6.4	1.1	59.2	石鏃	
132	縄文遺跡 4T	III a		砂岩	5.1	5.3	0.9	26.9	石鏃	
133	縄文遺跡 4T	-		砂岩	23.4	7.2	5.7	1178.4	砥石?	トーン部分外縁部

3 石器

石鏃 (図 63 124 ~ 126)

124 ~ 126 は有肩打製石斧である。用途が土掘り具と考えられ、石鏃として報告する。石材は 124 は砂岩、125・126 はホルンフェルスである。124 は刃部が欠損し、125 は柄部が欠損している。126 は大型の石鏃で、刃部の形状は「 ∇ 」形である。刃

部の剥離は周縁の剥離より古いため、刃部は元来、このような形状であったことも考えられるが、欠損による再加工の可能性も否定できない。全体が風化しており、摩滅などの使用痕は確認できない。126 は 124・125 に比して倍以上の大きさである。大きさの差異が機能差か、あるいは時期差によるものは現時点では判断が難しい。

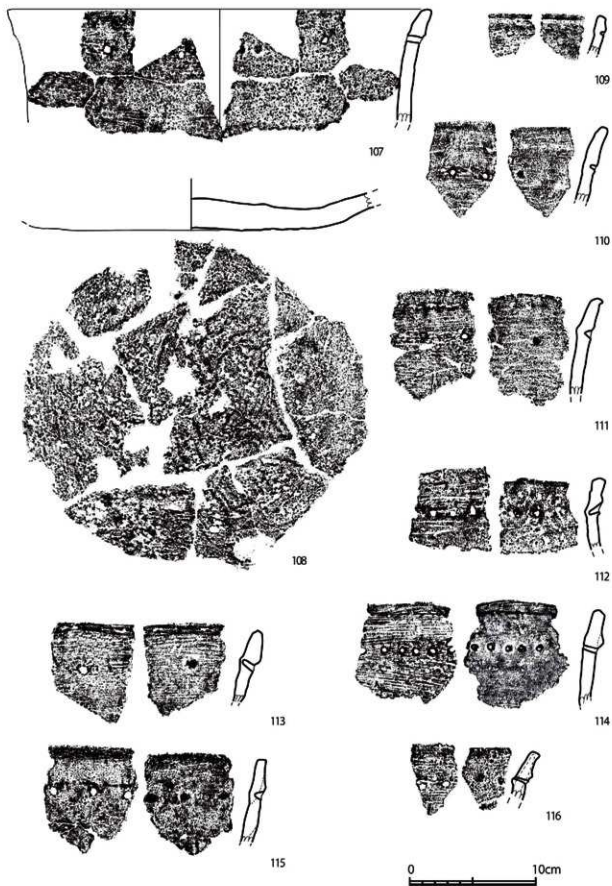


图 61 繩文時代晚期土器 1 (S=1/3)

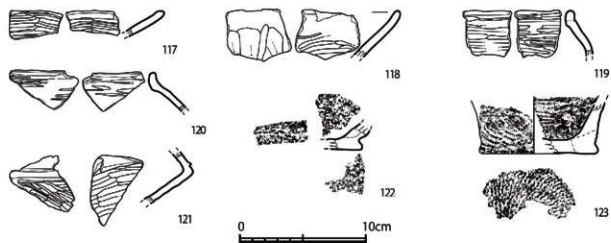


图 62 縄文時代晚期土器 2 (S=1/3)

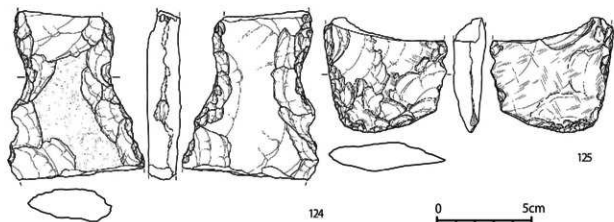


图 63 縄文時代晚期石器 1 (S=1/2)

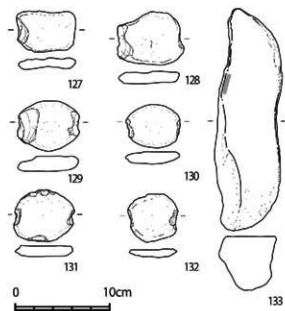


図 64 縄文時代晩期石器 2 (S=1/4)

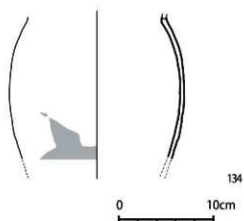


図 65 古墳時代中期土師器 (S=1/4)

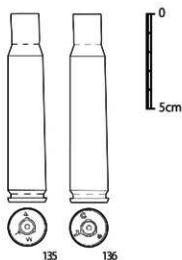


図 66 12.7mm 重機関銃弾薬莢 (S=1/2)

石錘 (図 64 127～132)

石錘は全て砂岩製である。大きさは5～6cm大、厚さは平均1.3cmと小型である。127～132は長軸の両端を打ち欠き、131は長短両軸を打ち欠く。132は短軸を打ち欠く。

砥石か (図 64 133)

133は図のトーン部分に研磨の痕跡が見られる。範囲が狭いため、確実には言い難いが、自然にできる面ではないため砥石の可能性が高い。

第4節 古墳時代以降の遺物

134は古墳時代中期頃の土師器甕である。確認調査時の4T I層から出土した。頸部～胴部下半までが残存している。図中のトーン部分は煤が付着範囲であり、胴部下半にのみ付着していることがわかる。今次調査における該期の遺物はこの土師器甕1点であり、ごく近接して該期の集落がないことから若干離れた集落から持ち込まれた可能性も考え得る。

135・136は表採であるが、12.7mm 重機関銃弾の薬莢である。刻印や口径から米軍使用のものと考えられる。底部の刻印は「4 T W」、「4 L C」と読める。底部には製造年と製造場所が打刻されるが、本資料の刻印の内容は不明である。現在、本遺跡の東方には航空自衛隊新田原基地が所在するが、第二次世界大戦中は陸軍航空隊の飛行場であった。大戦末期には、米軍がこの基地を標的とし、周辺一帯では航空機による爆撃や銃撃を受けた。本遺跡に近い西都市宮ノ東遺跡や新富町永牟田第2遺跡においても、同口径の薬莢及び弾丸が出土しており、往時の戦闘の激しさを物語る資料であるといえよう。



写真 10 12.7mm 重機関銃弾薬莢

第V章 自然科学分析の結果

今次調査では、縄文時代早期の遺構から炭化材が検出された。集石遺構は重複関係が少なく、先後関係の把握が困難である。炉穴に関しても、埋土と地山の色調・土質が似ていたため、VI層で検出した。また、遺構出土の遺物も乏しく、時期判定が困難で

ある。従って、遺構から検出された炭化材を自然科学的な年代測定にかけることによって、時期の判定の材料とすることにした。併せて、これらの炭化材については樹種同定も行い、当時の植生や燃料材の復元も試みた。

宮崎県、尾小原遺跡（三次）における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

第1節 放射性炭素年代測定

1 試料と方法

試料	地点・遺構	種類	前処理・調整	測定法
No.1	SI44	炭化材（コナラ属コナラ節）	酸-7%硝酸洗浄、石墨調整	AMS
No.2	SI16	炭化材（コナラ属コナラ節）	酸-7%硝酸洗浄、石墨調整	AMS
No.3	SI13	炭化材（コナラ属コナラ節?）	酸-7%硝酸洗浄、石墨調整	AMS
No.4	SP4b	炭化材（樹皮）	酸-7%硝酸洗浄、石墨調整	AMS
No.5	SP5	炭化材（コナラ属コナラ節）	酸-7%硝酸洗浄、石墨調整	AMS

AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

2 測定結果

試料名	測定 Na (Beta)	¹⁴ C年代 (年)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (年 BP)	暦年代 (西暦) (1 σ 68%確率 2 σ 95%確率)
No.1	209395	8250 ± 40	-26.0	8230 ± 40	交点: cal BC 7290 1 σ : cal BC 7320 ~ 7170 2 σ : cal BC 7430 ~ 7420, 7350 ~ 7090
No.2	209396	8250 ± 40	-25.4	8240 ± 40	交点: cal BC 7300 1 σ : cal BC 7330 ~ 7180 2 σ : cal BC 7450 ~ 7400, 7360 ~ 7100
No.3	209397	8210 ± 40	-25.4	8200 ± 40	交点: cal BC 7180 1 σ : cal BC 7300 ~ 7100 2 σ : cal BC 7330 ~ 7080
No.4	209398	8320 ± 40	-26.1	8300 ± 40	交点: cal BC 7340 1 σ : cal BC 7460 ~ 7320 2 σ : cal BC 7490 ~ 7280, 7230 ~ 7190
No.5	209399	8140 ± 40	-26.8	8110 ± 40	交点: cal BC 7070 1 σ : cal BC 7090 ~ 7060 2 σ : cal BC 7170 ~ 7050

(1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例により Libby の 5568 年を用いた。

(2) デルタ $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

(3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することによって得られる年代である。

(4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を校正することにより算出した年代 (西暦)。cal は calibration した年代値であることを示す。校正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された校正曲線を使用した。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と校正曲線との交点の暦年代値を意味する。1シグマ σ (68% 確率) と 2 σ (95% 確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

3 所見

加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定の結果、No.1 (SI44) の炭化材では 8230 \pm 40 年 BP (1σ の暦年代で BC7320 ~ 7170 年)、No.2 (SI16) の炭化材では 8240 \pm 40 年 BP (同 BC7330 ~ 7180 年)、No.3 (SI13) の炭化材では 8200 \pm 40 年 BP (同 BC7300 ~ 7100 年)、No.4 (SP 4) の炭化材では 8300 \pm 40 年 BP (同 BC7460 ~ 7320 年)、No.5 (SP 5) の炭化材では 8110 \pm 40 年 BP (同 BC7090 ~ 7060 年) の年代値が得られた。

文献

Stahle et al. (1998) IN CAL 95 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon 41, p.101-103.

中野健夫 (1999) 放射性炭素法。考古学のための年代測定学入門。古今書院。p.1-36.

第2節 樹種同定

1 はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木質細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近期の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2 試料

試料は、SI44、SI16、SI13、SP 4b、SP 5 から採取された炭化材 5 点である。これらは、放射性炭素年代測定を行ったものと同一試料である。

3 方法

試料を善折して新露材横断面 (木口と同義)、放射断面 (柱目)、接線断面 (板目) の基本 3 断面の切片を作製し、落葉顕微鏡によって 50 ~ 1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4 結果

表 12 に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

【コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus ブナ科写真 11-1・2・3】

横断面：年輪のはじめに大型の道管が 1 ~ 数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列または散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射線維は平伏細胞からなる。接線断面：放射線維は同性放射線維型で、単列のもので大型の広放射線維からなる複合放射線維である。以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。なお、部分的にコナラ属コナラ節の特徴を示すが、小片で広葉理の観察が困難な試料についてはコナラ属コナラ節?とした。コナラ属コナラ節には、カシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ 15 m、径 60 cm ぐらいに達する。材は油桐で弾力に富み、建築材などに用いられる。



横断面 ————— : 0.4mm 放射断面 ————— : 0.2mm 接線断面 ————— : 0.4mm
 1. OK-1 SI112② コナラ属コナラ節



横断面 ————— : 0.4mm 放射断面 ————— : 0.4mm 接線断面 ————— : 0.4mm
 2. OK-2 SI214b コナラ属コナラ節



横断面 ————— : 0.4mm 放射断面 ————— : 0.4mm 接線断面 ————— : 0.2mm
 3. OK-5 SP5 コナラ属コナラ節

写真 11 尾小原遺跡第三次調査の炭化材

【樹皮 bark】

篩部柔細胞、篩部放射柔細胞が見られる。以上の形質より、樹皮に同定される。

5 所見

分析の結果、コナラ属コナラ節3点、コナラ属コナラ節? 1点、樹皮1点が同定された。コナラ属コナラ節は、日当たりの良い山腹に生育する落葉高木で、冷温帯落葉広葉樹林の主要高木であるミズナラや二次林性のコナラなどが含まれる。当時の遺跡周辺で採取可能な樹種であったと考えられる。

文献

佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹林の樹皮。木材の構造。文芸堂出版。p49-100。

表 12 尾小原遺跡第三次調査における樹種同定結果

試料	結果 (学名/私名)
SI44	<i>Quercus sect. Prinus</i> コナラ属コナラ節
SI16	<i>Quercus sect. Prinus</i> コナラ属コナラ節
SI-13	<i>Quercus sect. Prinus?</i> コナラ属コナラ節?
SP4 b	bark 樹皮
SP5	<i>Quercus sect. Prinus</i> コナラ属コナラ節

第VI章 総括

第1節 尾小原遺跡発掘調査成果の概要

1 第一次調査成果の概要

【旧石器時代】

- ① AT 下位 (旧石器 I 期 竪崎10段階層第1段階相当)
礫群複数基 (掘り込みなし。赤化せず。礫分布は散漫。) ホルンフェルス製石器出土。
- ② AT 上位 (旧石器 II~IV 期)
II 期—礫群 1 基、剥片、台石?
III 期—礫群 7 基 (礫散漫・赤化せず、礫密集・赤化)
IV 期—礫群 (狭い掘り込み・礫密集・赤化)
遺物—ナイフ形石器・台形石器・角錐状石器・
周縁加工石器・搔器・二次加工剥片・敲石・
剥片・碎片・石核・細石刃

【縄文時代早期】

- ① 散礫 (約半数が赤化)、土坑 5 基 (陥し穴状遺構)
- ② 土器 1 点 (貝殻条痕文土器)、打製石鏃、石錐、
黒曜石原石

【縄文時代後期】

- 土坑 (年代測定結果 = BC1,630、BC3,990)

【近世以降】

- 焼き台 1 点 (付近に竈が存在したか)

2 第二次調査成果の概要

【旧石器時代 (AT 上位)】

- ① 第 I 文化層—石器ブロック 1 箇所、礫群 7 基、
角錐状石器、ナイフ形石器、スクレイパー、剥片、
碎片、台石、敲石
- ② 第 II 文化層 (Kc-Kb) —石器ブロック 1 箇所、角
錐状石器、ナイフ形石器、スクレイパー、剥片、
碎片、石錐、細石刃核、石核、使用痕剥片

【縄文時代早期】

- ① 陥し穴状遺構 4 基、土坑 1 基、
- ② 石鏃 (姫島産黒曜石)、剥片、敲石、礫器

【縄文時代晩期】

- 孔列文土器、黒川式土器

【弥生時代】

- 竪穴住居跡 3 軒、弥生時代後期層、磨製石鏃

【古墳時代】

- 須臾器製銅部

3 第三次調査成果の概要

【旧石器時代】

- ① 遺構なし
- ② ホルンフェルス製剥片 2 点 (VI 層)、
黒曜石製角錐状石器 1 点 (出土層位不明)

【縄文時代早期】

- ① 散礫
「層」(遺物包含層)として調査。
- ② 集石遺構 65 基
ある程度のまとまりをもって分布。大型 (瓦石
有り) と小型のセット関係。集石遺構の周囲に
大き目の礫が点在。遺構がない空間の存在。
- ③ 竈穴 7 基
検出層位は集石遺構より下位 (V b 層)。
SE31 (先) と SP3 (後) の先後関係。炭化材の
年代測定結果 (SP4=BC.7,340、SP5=BC.7,070)。
- ④ 土坑 3 基
不整形。2 基重複。詳細不明。
- ⑤ 碎片集中箇所 (2 箇所)
SR1 = 黒曜石碎片、SR2 = チャート碎片。
他の遺構と重複しない。石器未成品、石核出土
から石器製作跡か。
- ⑥ 土器 (押型文土器・貝殻条痕文土器他)
多様な押型文土器の出土 (初期の押型文—田村
ヤトコロ式まで)。南九州貝殻文土器、塞ノ
神式、沈線文 (早期末)。土製品 (詳細不明)
- ⑦ 石器 (石鏃・石核・剥片・磨製石斧他)
石鏃未成品 (遺跡内で製作か)。刃磨製石斧 (早
期の石斧)。赤色顔料? 付着石器

【縄文時代晩期】

- ① 集石遺構 (1 基)
- ② 土器 (粗製深鉢孔列文土器、精製浅鉢無文土器)
- ③ 石器 (石鏃・石錐・砥石)
石鏃は大小 2 種類

【古墳時代以降】

- ① 古墳時代初期土銅器製 1 点
- ② 127mm 重機軸鉋形銅葉 (WW. II、米軍使用)

第2節 尾小原遺跡発掘調査の総括

尾小原遺跡第一次～第三次調査の成果をふまえ、遺跡全体の評価を行う。

【立地、旧地形】

本遺跡の立地条件は第Ⅱ章第1節で記述したが、第一次・第二次と第三次では立地条件が異なるため注意を要する。すなわち、第一次・第二次調査区は尾根上の広い平坦地、第三次調査区はこの尾根から派生する小尾根上の狭い平坦地である。

次に、基本層序から旧地形と地形の変遷を考える。KAh層は、第一次調査区の大部分及び第二次調査区では開墾の影響で削平が広範囲に及ぶが、第三次調査区では安定的な堆積を示すが、AT層は第一次・第三次調査区で部分的に堆積していた。各層の堆積状況から、AT層以前は火山灰が堆積し難い地形であり、現在の地形の基礎はKr-Kbを含む層が堆積する頃であったと推定される。第三次調査区ではKr-Kbを含む層以上の層は現在とほぼ同じの傾斜で堆積しており、旧石器時代から現在まではほぼ同じ地形であったと考えられる。また、現在、第二次と第三次調査区の間は平坦で、Kr-Kwが露出する。この場所を挟んでKAh層が堆積するため、元来第三次調査区の間には高い地形があったと考えられる。

なお、第三次調査のある小尾根の延長線上には高千穂峰がある。空気が冷んだ冬季では本遺跡からも高千穂峰が見られる(写真12)。さらに、尾鈴山、市房山、鯉塚山もみられ、宮崎平野周辺の主要な山が一望でき、本遺跡は眺望豊かな場所に立地する。

【旧石器時代】

AT下位は第一次調査で宮崎10段階編年の第1段階相当の遺構・遺物が確認された。

AT上位は第一次・第二次調査で多くの遺構・遺物が確認された。第一次調査では3期に分けられ、各時期で礫群の様相が異なり、遺構の変遷を考える上で重要な資料となろう。第二次調査では石器ブロックが2箇所検出され、角錐状石器やナイフ形石器等が出土した。石器ブロックの周囲には赤化礫や角礫で構成された礫群が分布し、中間地点に台石と散石が出土するなど石器製作過程を示す特徴があった。

た。石器石材は本遺跡周辺に分布しない赤化岩や黒曜石が多く、遠隔地との交流がうかがえる。第三次調査ではKr-Kbを含む層から剥片2点と出土位置不明の角錐状石器1点が得られたのみであり、当時の人間活動の場合は台地縁辺から若干内陸に入った第一次・第二次調査区周辺であったと考えられる。

【縄文時代早期】

遺構の在り方について、第一次・第二次調査と第三次調査では対照的である。第一次・第二次調査では陥し穴状遺構と土坑が検出され、第三次調査では集石遺構・炉穴・土坑・碎片集中箇所が検出された。陥し穴状遺構は狩猟用の施設、集石遺構・炉穴は調理施設であるという解釈が一般的であり、碎片集中箇所が石器製作跡と考えれば、当時、人間活動の拠点は第三次調査区のある小尾根であり、第一次・第二次調査区周辺は狩猟場であったと考えられよう。

土器については第一次調査で貝殻条痕文土器、第三次調査では押型文土器を中心に各種の土器が出土した。押型文土器は口縁部が直立気味に立ち上がり、外面に山形押型文を横位に施すもの、早水台式土器、下管生B式土器など導入期～旧村ヤトコロ式期までのものが断片的にみられる。貝殻条痕文土器は桑ノ丸式・下刺釜式土器など早期中葉のものが大半である。早期末の土器は寡ノ神式と沈線文土器が顕著かに出土したのみである。遺物の時期からは第三次調査で検出された遺構の存続時期は早期中葉から後葉を中心とし、早期末を降らないと考えられる。

なお、押型文土器では特殊な原体のものがみられる。一つは三日月形の押型文で、器形と施文方法・部位から推せば、下管生B式土器の一種であろうか。二つめは格子目の押型文で、通常の格子目押型文は格子部分が線状であり、形も正方形に近いが、本資料は格子部分の幅が広く、形も長方形である。

【縄文時代後期】

後期の遺構は第一次調査で土坑が検出されたのみである。埋土から遺物は出土せず、出土炭化物の年代測定結果から後期と判断された。

晩期の遺構は第三次調査で集石遺構1基が検出された。遺構出土の遺物はなく、周辺出土の土器は晩期のもののみであった。他に第二次・第三次調査で

粗製深鉢の孔列文土器と精製鉢無文土器が出土した。不器は第三次調査で石鐘と石鐃が出土しており、何らかの生産活動の痕跡もよかがえるが、早期に比して人間活動は低調であったと考えられる。

なお、南九州では石鐃が古墳時代まで残っており、高脚町下耳切第3遺跡では古墳の周溝から石鐃が出土した。古墳時代遺物の可能性も考えられよう。

【弥生時代】

第二次調査では竪穴住居跡3軒が確認され、この内1軒から後期の壺1点が出土した。削平が広範囲に及んでおり、集落の広がりを想定できよう。

【古墳時代】

古墳時代の成果は僅かで、第二次調査で須恵器表胴部の小破片が、第三次調査で中州土師器表1点が出土したのみである。本遺跡の所在する新田原台地には祇園原古墳群が、台地の縁辺には竹淵C遺跡・銀代ヶ辻遺跡などの集落遺跡も存在する。本遺跡出土の遺物は少量だが、周辺遺跡との関係上意義深い。

【近世】

第一次調査では窯道具の焼き台が出土した。遺跡周辺に窯跡が存在した可能性がある。

【近代】

第三次調査で127mm重機銃弾弾薬2本(WW. II、米軍使用)が表採された。東九州自動車道開通発掘調査では戦争関係遺構・遺物が多数確認されている。本遺跡周辺でも空襲の記録が残り、経験者もいるが、高齢化によって今後その経験を次世代へ伝えることが困難になるであろう。将来、戦争関係遺構・遺物が有力な歴史資料となることは確実である。

第3節 集石遺構に関する検討

本節では今次調査における散礫と集石遺構について若干の考察と、調査方法の問題点について述べる。

散礫は範囲と重量分布(図67)を記録した。大規模な集石遺構のある区画は散礫の重量も多く、集石遺構の規模や密度と比例する傾向がある。礫重量は地形の傾斜に沿って西方向に重量が漸減する。これらのことは散礫が集石遺構と密接な関係をもつことを想起させるが、地形傾斜に応じて流出した状況が認められるため、遺構であると判断し難い。同じく

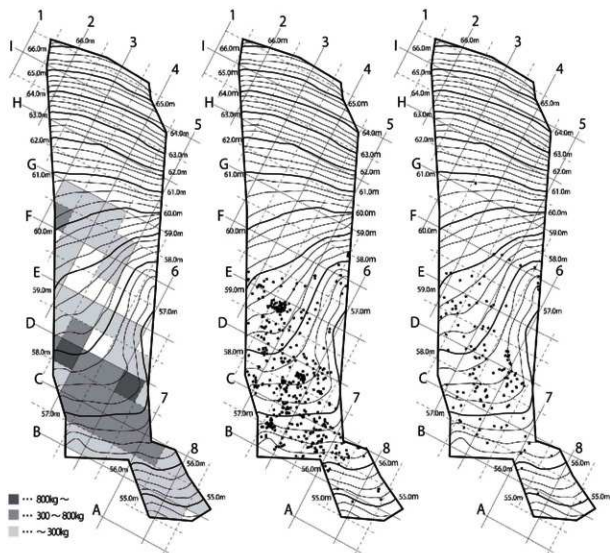
図67に土器と石器の分布図を掲載したが、遺物分布は散礫の範囲と重複するが重量とは対応しない。散礫中の遺物は原位置を保っていない状況で出土したことも合わせて、散礫を遺物包含層と捉えたい。

今次調査では散礫と集石遺構の構成礫を計量した結果、散礫が11,815kg、集石遺構が6,266kg、合計18,081kgであった。これらの礫は本遺跡の基盤層である段丘礫層の礫と同種である。また、今次調査区より高所に礫が露頭している場所が見られないため、礫は全て人為的に今次調査区内に持ち込まれたと考えられる。遺跡周辺の開析谷には段丘礫層の露頭が見られることから、遺跡で検出された礫は遺跡周辺の露頭から入手した可能性が高い。

宮崎県では2003年時点で2,886基の集石遺構が調査されてきた(九州縄文研究会2003『九州縄文時代の集石遺構と研究』)。調査・研究の蓄積は大きい。現在の研究動向は低調であり、新たな視点からの研究が期待されている。また、行政における発掘調査では集石遺構の記録作業が調査期間を圧迫しているという指摘がある。研究の進展や調査の迅速化を考えた場合、新しい視点が必要である。

今回調査では第IV章第2節で述べたように、記録方法を改めたが、問題点もある。検出状況写真は図面に置き換わるものと考えたため、可能な限り垂直方向から撮影したが、検出写真の扱いを図面とは区別して考えれば、垂直撮影する必要はないであろう。また、礫の赤化や形質等の情報を書き込んだ実測図もあったが、カラー写真で表現可能であると考えられる。従って、カラーの検出状況写真を報告書に掲載してはどうだろうか。また、礫の分布から人間活動の痕跡が推定・推定できる遺構であれば実測図を作成する必要もあろう。個々の遺構の状況によってさまざまな記録方法をとれば、調査期間・経費の圧縮にも繋がるであろう。断面写真は半載状態で撮影する方法。遺構の半分を断削する方法が考えられる。半載状態での断面撮影は礫の堆積状況を明確に捉えがたいため、写真のみでは不十分かもしれない。

今次調査では、新しい記録方法を試みたが、改良点や問題点もある。今後、研究を深化させ、さらに改良していく必要がある。



【 散 礫 】 【 土 器 】 【 石 器 】
 図 7 散礫重量分布、土器分布、石器分布 (SR1・SR2は除く) (S=1/800)



写真 12 尾小原遺跡から望む高千穂峰

写 真



C4区 集石遺構分布 1



C4区 集石遺構分布 2



Gr.5 付近以北集石遺構分布



Gr.5 付近以南集石遺構分布



SI44・SI45・SI46 検出前



SI44・SI45・SI46 検出状況



SI 1 配石検出状況



SI 4 配石検出状況



SI10 配石検出状況



SI15 配石検出状況



SI16 配石検出状況



SI22 配石検出状況



SI24 配石検出状況



SI30 配石検出状況



SI32 配石検出状況



SI37 配石検出状況



SI39 配石検出状況



SI44 炭化材検出状況



SI43 配石検出状況



SI44 配石検出状況



SI51 配石検出状況



SI60 配石検出状況



SI31 配石検出状況



SP1・SP2 完掘状況



SP4・7 検出状況



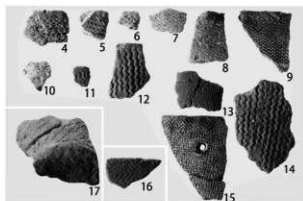
SP6 半載状況



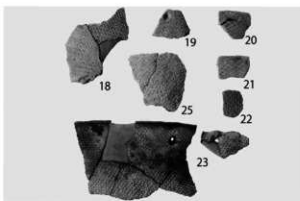
SI66 検出状況



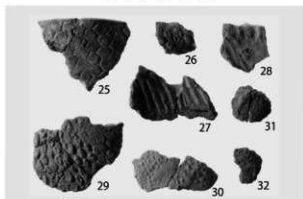
III b 層上面調査区全景 (西から)



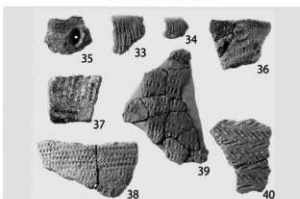
押型文土器 (山形)



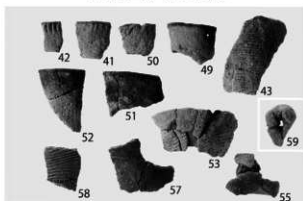
押型文土器 (細粒楕円)



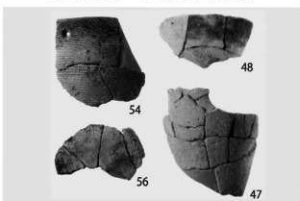
押型文土器 (粗大楕円)



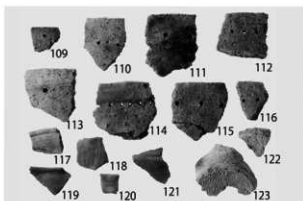
撚糸文土器・その他の押型文土器



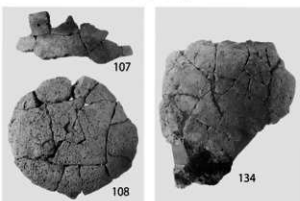
貝殻条痕文土器 1



貝殻条痕文土器 2

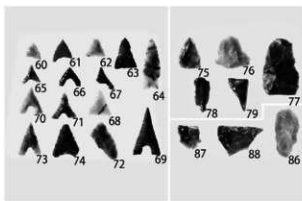


縄文時代晩期土器 1

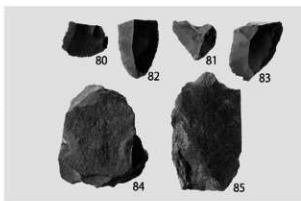


縄文時代晩期土器 2

古墳時代中期土器



縄文時代早期石鏃



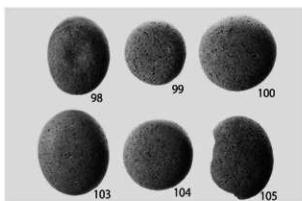
縄文時代早期剥片・スクレイパー



縄文時代早期石斧



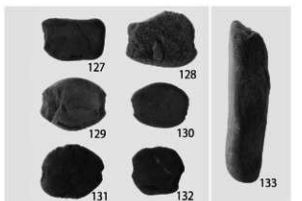
縄文時代早期石核・二次加工剥片



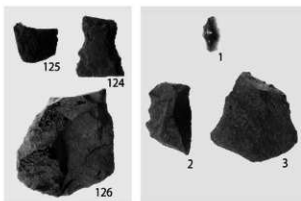
縄文時代早期磨石



縄文時代早期岐石・赤色顔料? 付着石器



縄文時代晩期石錘・砥石



縄文時代晩期石鏃

旧石器時代石器

報告書抄録

ふりがな	おこぼらいせき (だいさんじちょうさ)							
書名	尾小原遺跡 (第三次調査)							
副書名	東九州自動車道 (都農～西都賀) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 45							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第 150 集							
執筆・編集 担当者名	岡田 諭							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒 880-0212 宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地							
発行年月日	2007年3月9日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
おこぼらいせき 尾小原遺跡	宮崎県 都農郡 新富町 大字新田 字尾小原	45401		32° 05' 29"	131° 25' 49"	2004.12.1 ? 2005.5.13	2,000㎡	東九州自動車道 (都農～西都賀) 建設に伴う発掘 調査
種別	主な時代			主な遺構		主な遺物		
集落跡	旧石器時代 縄文時代早期 縄文時代晩期 古墳時代中期 近代			集石遺構 65 基・ 炉穴 7 基・土坑 3 基・ 碎片集中箇所 2 箇所 集石遺構 1 基		角錐状石器 押型文土器・貝殻条痕文土器・無文土器・ 石鏃・石錘・スクレイパー・石斧・石核・ 磨石・敲石・赤色顔料?付着石器 孔列文土器・無文土器・石鏃・石錘・ 砥石 土師器甕 127mm 重機関銃弾薬英		

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第150集

尾小原遺跡（第三次調査）

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 45

2007年3月9日

発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地
TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印刷 田中印刷株式会社
〒880-0022 宮崎県宮崎市大橋3丁目110番地
TEL 0985(28)4724 FAX 0985(22)9285
